

「消え失せろ、この感情」

金 民 愛

登場人物

加賀美 茜 (50) (40) 小説家  
尾畑 一樹 (27) (17) 茜の担当編集  
梶 雄大 (27) (17) 茜が潜入した会社の教育担当  
椎名 昌平 (52) (42) 編集長  
福永知永子 (36) 茜が潜入した会社の社員  
山口 翔太 (24) 茜が潜入した会社の社員  
加賀美 葵 (32) 茜の娘  
“ (13)  
加賀美 緑 (5) 葵の息子  
加賀美 琥珀 (3) 葵の息子  
加藤詩織 (15) アイドル  
坂崎二ノ (18) 若手女優  
ドラマ出演者  
司会者  
本屋の店主  
居酒屋の店員  
男性 A  
女性 A  
野次馬達

○本屋・外観（夕）

住宅街。

路上に面した本屋が入ったビル。

ピンクのウサギの着ぐるみを着た加賀

美茜（40）。屋上を見上げている。

茜の隣で椎名昌平（42）が店主に名

刺を渡しペコペコと営業をしている。

椎名、茜を紹介しようとするも茜の姿

はない。

○同・屋上（夕）

夕焼け。紫色に染まった空と雲。

ポロポロに切り刻まれた学生靴。

尾畑一樹（17）、虚ろな表情で手す

りの前に立っている。

下を覗くと通行人が行き交う姿が見え

る。路上の人通りが少なくなる。

尾畑、深呼吸をし、手すりを力強く握

り、よじ登ろうと足をかける。

茜の声「あんた、死ぬつもり？」

ビクッと驚く尾畑。バツが悪そうに振り向く。

ピンクの着ぐるみを着た茜、仁王立ちしている。

尾畑は怪しい奴を見るかのように茜を眺める。

茜は尾畑に近づきながら、

茜「答えなさい。今から、何をするつもり？」

尾畑「何を・・・」

気まずそうな尾畑。

茜は着ぐるみの顔を取り外す。

長い髪がなびいて汗がキラリと光る。

茜「堂々と答えられないなら、やめなさい。」

屋上に上がる前に本を読め。本を」

尾畑「・・・ほ、本？」

茜は人差し指でこめかみを抑えながら

茜「生きてくうえで、想像力って大事。本を

読んで培うの。現実逃避にもなるし、一石

二鳥極まりないわ。本は人類最強の武器よ」

尾畑は顔をしかめながら、

尾畑「おばさん、何も知らないくせに」

茜「そうよ。だから、私は顔を取って見せたでしょ。あんたも心の内を見せなさい」

尾畑「はあ？勝手に外したただけだろ」

話を聞いていない茜。

茜「大体、学生のおんたの仕事はね。未来を想像することよ。たったの2時間後の未来。簡単でしょ。想像出来た？」

はっ？という表情の尾畑。

茜「あんたが飛び降りることで。この、私のサイン会はどうなると思ってるの！パーよ。パー。ぶち壊しじゃないのよ。バカタレ」

茜は尾畑に本を無理やり持たす。

茜「特別にサインしといたわ。デビュー作よ。読んだ後、生きるという感情しか芽生えなはずだから読みなさい。解った？」

ポカンとする尾畑。

茜「返事！」

尾畑「（咄嗟に）は、はい」

茜「男に二言は無いわよ」

茜は尾畑の背中を叩き、

茜「それと。子供に自殺された親はね、あんたが想像してる以上に悔しくて悲しいのよ」

じゃ、と手を上げ颯爽と立ち去る茜。

尾畑、呆然と立ち尽くす。

本の表紙にタイトル。

【消え失せる、この感情】。

○同・屋上（夜）

ビルの電灯が光り輝く夜景。

尾畑、小説を読み終える。

鼻をすすりながら泣いている。

尾畑は、勢いよく遺書を破り捨てる。

作者紹介ページに茜のサイン。

サインの隣にウサギの絵。

○テレビ局・ドラマ制作会見場・中

沢山のテレビカメラに記者達。

ピンクのウサギの着ぐるみを着た加賀

美茜（50）、登場する。

上看板【実写化 消え失せろ、この感情】の下に加藤詩織（15）・坂崎二ノ（18）、他ドラマ出演者達が拍手をしている。

スタンドマイクの前には司会者。

司会者「原作者の赤嶺鏡子先生が特別に駆け付けて下さいました！顔出しは一切NG。メディアにも出演しないで有名ですが」

茜はスタンドからマイクを取り外し

怒りモードで、

茜「はい、紹介ありがとうございます。そうです。有名小説家です。けど、私は認めてません。原作の設定では中学生でしょうが。何でドラマだからって高校生にしちゃってんのよ」

ざわつく会場。

茜は詩織を指さし、

茜「主人公の川上陽子役よね。可愛い顔して演技が下手だったら許さないから。親友の葵役もよ。あんた達、小説に、泥塗るなよ」

椎名昌平（52）・尾畑一樹（27）

が慌てて止めに入る。

暴れる茜を連れ出す尾畑とスタッフ。

椎名、マイクをスタンドに戻し、

椎名「えー、虐めバトンの呪いを受け取った親友を主人公が助ける感動ヒューマン小説のドラマです。原作者共々楽しみにしております。原作小説も買って下さいね」

椎名は丁寧にお辞儀をして、急いで退場する。一同、啞然としている。

○同・控室・中

尾畑は控室のドアの鍵を閉める。

椅子に座っている茜。

茜の隣で椎名が喜んでいる。

椎名「お前、よく言った。これで、また本が売れるぞ」

茜、イライラしながら、

茜「そうよ。本の為よ。あの作品は私の子供なの。子供の一部を変えられた親よ。一言モノ申して当然でしょ。大袈裟に退場させ

て。炎上を狙ってるとしか思えない」

椎名「そう言うなよ。お前の我儘聞いてやっ  
たじゃないか」

驚く尾畑。

尾畑「編集長。あの話、承諾したんですか？」

椎名「友達の会社に話つけといた。明日から、

赤嶺先生は念願の潜入派遣OLさんだ」

茜は仁王立ちで、意気込む。

茜「明日から、忙しくなりそうね」

尾畑「・・・無謀過ぎる」

茜「バカタレ。次の作品の主人公はOLなの  
よ。リアリティを迫及する為の潜入なのよ」

尾畑「正体がバレたりしたら、どうするんで  
すか？」

椎名「バレたら次のサイン会で挨拶すりや良  
いんじゃないか？」

無表情で椎名を見つめる尾畑。

椎名「おー、怖っ。赤嶺信者め」

尾畑「いや、これ、ビックリしてる顔です。

顔出しNGは編集長によるイメージ戦略っ

て聞いてたから」

しんみりとした様子の茜、

茜「違うわよ。顔出しNGは家庭の事情よ」

ん？つと、首を傾げる尾畑。

○高層ビル・入り口（朝）

ガラス張りのビル。

茜は仁王立ちでビルの上を眺めている。

茜、バッグから古びたピンクのウサギ

のぬいぐるみ（掌サイズ）を取り出す。

（以降、ぬいぐるみと称す）

茜「葵、お母さん。また良い小説書くからね」

茜、ぬいぐるみを握り深呼吸する。

○エスケイプリアル・フロア・中

100名程の収容フロア。

壁に飾られた額縁に社名。

【S c a p e R e a l】

インテリアに凝っていてカフェのような印象。社員達で賑わっている。

社員は各々、好きな場所でコーヒーを飲んだり音楽を聴きながら作業してる。驚愕している茜。

福永知永子（36）、茜にフロアを案内している。

知永子「茜さん、仕事お出来になりそうなのに。正社員にはならないんですか？」

茜「正社員にならないとダメなの？」

知永子「いえ、そうゆう訳では。正社員の私  
が、とやかく言う権利は無いんですけど。

最近は色んな働き方も、ありますし」

茜は知永子の背後でガンを飛ばす。

2人の元へ梶雄大（27）が近づいてくる。

知永子「茜さん。こちら、カジダイさん。茜

さんのメンターよ」

梶「セールスプランニングのカジダイです。

今日からお願いします」

知永子が会釈しながら立ち去る。

梶「会議室が抑えられなかったので、あそこ

で研修しましょうか」

はっ？と口をポカンと開ける茜。

2人掛けのソファ―。

茜「（小声で）カップルシートで研修？」

× × ×

茜と梶、ソファ―で隣り合わせに座り

研修をしている。

ノートパソコンを睨みつけている茜。

梶「とまあ、スラックはメールツールの一種

とゆう事で、使い方も大丈夫そうですね」

首を傾げ不安そうな茜。

梶「何かあったらメンションしますので、必

ずウオッチして下さい。あとでグループに

ジョインしますね」

フリーズ状態の茜。

梶はノートパソコンを閉じる。

梶「ランチにしましょうか」

2人の元へ知永子が近寄ってくる。

知永子「茜さん、スラックネーム。自分の名前にしたんですね。なんでも良かったんで

すよ。アカネツチとか」

茜、苦笑いを浮かべる。

知永子「うちは、フレンドリーな会社なので  
ニックネームで皆の事を呼んで下さいね」

茜「上司をあだ名で呼んでんの？時代は変わ  
ったのね」

知永子の顔が引きつる。

知永子「それでね、カジダイさんに茜さんの  
業務のアサインをお願いしたくて」

茜「（小声で）・・・サイン？」

茜はポケットからペンを取り出す。

知永子「今から、ミーティング大丈夫？」

腕時計を見る茜。【12時45分】。

梶は笑顔で、パソコンを開き

梶「全然大丈夫ですよ。ねっ？茜さん」

梶のお腹が鳴る。うんざりする茜。

茜「それって、今すぐ必要なの？梶さん、お  
腹空いているんでしょ」

困惑する梶。

知永子は一瞬だけ顔を歪ませるも、す

ぐに微笑を作り、

知永子「そうでしたね。一般的にはランチの時間ですものね。けど、仕事の話だから」

茜「ランチした後じゃダメな理由って？」

知永子は茜を睨み、

知永子「カジダイさん。プライオリティが高いのはミーティングよね。ランチよりも」

梶は困惑しながら2人を交互に見る。

梶「じゃあ、先に2人だけで。その後に俺から茜さんに伝えます。俺と2人っきりのミーティングじゃ嫌ですか？」

知永子「良いけど……。茜さん、年齢を気にせず言わせて頂きます。モチベーションは高くして下さいね。お願いしますね」

梶「まあまあ、茜さんも初日ですから」

知永子は茜を威嚇しながら立ち去る。

茜は知永子にガンを飛ばす。苛つきながらメモを取る。

茜「(震えた声で)あの女、いつかタイマン」

メモ書き【喧嘩上等。異世界上等！】

○同・フロア・中（夕）

茜のデスクの上に付箋だらけの【IT  
ビジネス用語集】の本。

素早くタイピングする茜の指。

茜、エンターキーを力強く押して

茜「梶さん、終わりました」

梶「早い！茜さんがいてくれて助かりました」

茜「入力だけは早いので・・・」

隣の席の梶、アイスを食べながら仕事  
をしている。

茜はゴミ箱を覗く。

ゴミ箱にはアイスの棒やカップのゴミ。

茜「ねえ、梶さん。さっきもアイス食べてた

わよね？食べ過ぎじゃない？お腹壊すわよ」

大袈裟に笑う梶。

梶「嬉しいな。よく見てくれますね。けど、

アイス好きなんで大丈夫です。食べたらす

トレスなくなるし。オススメですよ」

茜「仕事のストレス？」

梶「まあ。でも、仕事って、ストレス付きで

給料もらってるから仕方ないですよね。茜  
さんのストレス解消法は何ですか？」

茜「私の場合は本を読むことよ」

梶、嘲笑う。

梶「俺、本を見ると吐き気します。文字が沢  
山あるの苦手で。ページを進めていくのが  
ノルマみたいで、しんどくて。今は動画も  
あるし。進化してる時代への冒険を感じる」

茜は啞然とする。

茜「・・・そんな風に思う人もいるのね」

2人の元に近づく山口翔太（24）。

山口「あ・・・」

山口は気まずそうに

山口は梶に契約書（製本前）を渡す。

山口「今日中に製本と郵送お願いしたくて」

茜はPCの時計を見る。

【16時45分】

茜「梶さん、郵便物は15時までって。ルー  
ルよね。製本くらい自分で出来るでしょ。  
ごめんなさい。お断りします」

愕然とする山口。

山口「俺、製本できないんですけど・・・」

茜「ネットで調べれば良いじゃない」

山口は梶をチラ見する。

笑顔を作る梶。

梶「ショウタ君、今回だけ特別だよ」

山口「良かった。カジダイさんが暇で」

山口は契約書をデスクに置き、お礼もせず立ち去る。

山口は茜を見て鼻で笑う。

茜は怒りで立ち上がる。

梶「（小声で）暇じゃねーし」

梶がイラついた様子で、契約書を製本し、レターパックに住所を書く。

茜「本人の前で怒るべきだわ」

梶「ごめんなさい。イライラしてました？気を使わせましたよね。でも大丈夫です」

茜「あら、イラついて当然よ」

梶は立ち上がり、早口で

梶「いや、本当に苛ついてないです。じゃ、

郵便局行ってきます」

立ち去る梶。デスクの上には溶けたアイスクリーム。

茜は、メモを取る。

【イケメンは八方美人で本が嫌い。本は古いの？本はつまらないの？】

○走る電車の中（夕）

混雑している車内。

椅子に座り本を読んでいる茜。

茜は周りを一瞥する。

乗客は全員、スマホで動画を見たり音楽を聴いている。

落胆する茜。

○大衆居酒屋・カウンター・中（夜）

店内は満席。

L字カウンター席に茜と尾畑。

目の前に大ジョッキのビール2つ。

茜は乾杯もせずに、音を鳴らしビー

ルを半分程飲み干す。

手持ち無沙汰な尾畑。

茜はグラスをテーブルに叩きつけ、

尾畑を睨みつける。

尾畑は無視しながら店員に料理とビールを注文する。

尾畑「先生。僕は止めましたよ。先生にOLは向いてないから、やめましょうって」

茜「尾畑、外で先生は禁止って言ってるでしょ。どこにSNSが潜んでるか解らないんだから。怖い世の中なのよ」

茜はサングラスをかけ、顔を隠すようにスカーフを巻く。

尾畑「・・・先生は何故、そこまでして顔出しNGなんですか？」

茜はサングラスを少しずらし、尾畑に向かい鋭く睨む。

尾畑「すみませんでした。では愚痴。どうぞ」  
嘆きだす茜。

茜「無理。皆してルー大柴みたいな話し方。

もう耐えられない。ウオッチして下さいって言われたのよ！想像してたOLライフと全くもって違うわ。私が古いだけ？」

尾畑「グローバルな会社なんですね」

茜「この際、愚痴本にしようかしら。今日だけで50枚は書けるわ。第1章。上司をあだ名で呼ぶ時代に虫唾が走る」

尾畑「バカなんですか」

尾畑、しくじった。と手で口を隠す。

茜「本当それな」

「えっ？」という尾畑の表情。

深い溜息を吐く茜。

茜「私に教えてる人が八方美人……。男だから八方イケメンが良い人過ぎて辛い。苦手なタイプ。良い人を演じて好かれようと努力してるの。私、そうゆうの疲れる。もつと本音でぶつかって来て欲しいのよ」

尾畑「良い人を演じるって、普通じゃないですか？僕だって初対面の人には良い人ぶつてますよ。波風立てたくないし。普通、す

ぐには心開かないですって」

茜は顔を歪ませ、

茜「あだ名で呼び合って仲良しごっこまでしてるのに、心の内は見せないの？つまんない世の中ね」

尾畑「次の作品にリアリティが必要なんですよ。小説のネタだと思えば良いじゃないですか。職場で人間関係を求めてない人なんて、世の中には沢山いるんです」

茜「尾畑も、そっち系ってこと？」

嘲笑う尾畑。

尾畑「僕の場合、会社以外でも、どこでも薄い人間関係しか築けないです」

茜「嫌なら、分厚くしていけば良いじゃない」

尾畑「それが出来ない人もいますよ」

茜は、悲しそうに笑い

茜「そういえば。葵も似たようなこと言ってたっけ」

尾畑「葵って・・・川上陽子の親友役の葵？」

わずかに残っているビールグラス。

店員がビールと料理を置き、グラスを下げる。泡の少ない新しいビール。

茜は立ち上がり、大声で

茜「まだ残ってたんだから、一声かけなさい。そして、このビール、泡が少ないじゃない」

尾畑は周りを見ながら、気まずそうに謝罪の会釈をする。

店員が萎縮しながら新しいビールを持ってくる。

尾畑「やめて下さいよ、恥ずかしいですって」  
茜「なぜ？今のも、世間一般的には恥ずかしい姿なの？」

茜は落ち込み肩を落とす。

茜の変わりように啞然とする尾畑。

茜「解ってる。今の時代、世間一般の若者が好きなのは動画なのよね。どうせ私は終わりよ。本を手にとってくれなかったら、頑張っても意味がない。私は無力だわ。とても」

尾畑「もう酔っぱらったんですか？」

茜「ちよつとしたモヤよ。たまに、モヤとかイラツとか黒い感情に包まれるの」

茜は頭を抱える。

茜「あー、会社に行きたくないって人の気持ち解ってきたわ。自分の合わない世界の中に紛れ込むの辛い。新しいこと覚えるの大変。しんどい。念願のOLになれたのに」

尾畑「忙しいですね。怒ったり、落ち込んだり。普段は明るかったりって」

茜「バカタレ。それが私という人間なのよ」

呆れ果てる尾畑。

気分が下がっている茜。

尾畑は茜の背中をさすり、

尾畑「悪い癖ですよ。最初から嫌いや苦手を探すの。まず、好きを数えましょう。会社に行きたくなるように視線を変えるんです」

茜「あの会社で好きな事・・・？年下のイケメンから名前と呼ばれることかしら」

尾畑「良い調子ですよ。ほら、大好きな言葉。女に？」

茜「二言はない」

尾畑「そうです！次もヒット狙いましょう」

茜「・・・間違はなく大ヒットだわ」

茜、鼻で笑う。

○エスケイプリアル・フロア・中

茜はノートパソコンを閉じて、財布を

片手に立ち上がる。

梶「あの、茜さん。もし、良かったら」

梶が照れ臭そうにお弁当箱を茜に差し

出す。

驚く茜。

茜「えっ？私に？！」

梶「手作り弁当です」

茜「私の為に作ったってこと？」

戸惑う茜。

梶「実は、ショウタ君からランチ誘われて。

捨てるの勿体ないんで」

首を傾げる茜。

茜「どうゆうこと？」

梶「俺、弁当男子なんです。毎日作って」

茜「そうじゃなくて。お弁当があるって、断れば良いじゃない」

梶「他人からの誘い、断れないんですよ」

茜「・・・そう」

茜、お弁当を受け取る。

茜「それなら、ありがたく頂きますね」

梶「ぜひぜひ。俺、料理趣味なので不味くはないはず。感想待ってます」

ニコツと笑い、立ち去る梶。

腑に落ちない様子の茜。

豪華なお弁当の中身。

卵焼きの盛り付けがハートの形。

動揺する茜、メモを取る。

メモ書き【これ、愛の告白だわ】

○大衆居酒屋・カウンター（夜）

L字の席に茜と尾畑。

2人はビールを飲んでいる。

机の上には料理が並んでいる。

茜は真剣な表情で

茜「私の上司。私に恋してるのよ」

ビールを吹き出し、咳き込む尾畑。

茜「だって、納得いかないのよ。なんで、ラ  
ンチの誘いを受けたのか。上司なら仕方な  
いけど、相手は媚びる必要のない後輩よ。  
一切、自分の利益にならない相手よ」

尾畑「そこから何を根拠に、恋の話に？」

茜「本当は私の為にお弁当を作った。けど、  
恥ずかしいから誘われたって嘘ついて渡す  
しかなかったの。だって、おかげがハート  
だらけだったのよ」

尾畑「羨ましいです。ポジティブな考えが出  
来るって。僕は根がネガティブなので。ハ  
ートのおかげを貰っても何の感情も芽生え  
ませんよ」

話を聞いていない茜。

茜「私ったら、社内恋愛も経験しちゃうのね。  
相手は年下イケメンよ」

嬉しそうな茜。呆れる尾畑。

尾畑「あの、この前まで会社に行くの嫌だとか上司が苦手とか落ち込んでましたよね？」

茜「私の場合は、負の感情が芽生えても明日には忘れちゃうタイプなんです」

尾畑「そうですか。良いですね。僕は根に持つタイプのコンプレックス製造機なので」

茜は尾畑をジッと見つめる。

尾畑は焼き鳥を食べている。

尾畑の腕に古い切り傷の痕。

茜「川上陽子の親友。虐めを受けていた葵。

このキャラを作るのに虐めを受けていた子、100人に取材したのよ」

尾畑の動きが止まる。

尾畑「編集長から聞きましたよ。親御さんからクレームまでもらったとか」

茜「他人に優しく、少し控えめって子が多かったの。上司も同じ。私、解っちゃうのよ」

尾畑「噂の上司さんが虐められてるとでも？」

茜「恐らく。それがさ、バカな若者の会話の中にね、急ぎの案件や面倒なのは梶さんに

頼んどけば何とかなるって」

尾畑の心臓の音。

冷や汗が滴り落ちる尾畑の顔。

尾畑は冷静を装いながら

尾畑「カジ？下の名前は？」

茜は尾畑の異変に気付きながら、

茜「・・・ユウダイ。カジ・ユウダイ」

店内の点灯がやけに眩しい。

焼き鳥が床に落ちる。

○（回想）高校・教室・中（夕）

教室の点灯が光り輝き、眩しい。

尾畑一樹（17）が倒れている。

うつろな表情。殴られた跡。

目の前には上履き。「梶 雄大」と書

かれている。

梶雄大（17）逆光で顔が見えない。

手に持つカッター。カッターの刃が上

下に移動している。

○大衆居酒屋・カウンター（夜）

咄嗟に腕を抑える尾畑一樹（27）。

軽い過呼吸になりながら、立ち上がる。

椅子が倒れる。

尾畑「梶……。僕を、虐めてた奴の名前」

2人は目を見合わせる。

○高層ビル・入口前・外（夜）

人通りは、まばら。

茜、身を隠しながら入口に近づく。

茜の後ろには尾畑。

尾畑「帰りましょう。同姓同名なだけかも」

茜は入口を凝視する。

茜「来た！」

尾畑が茜の背後から入口を見つめる。

尾畑、唾を飲みこむ。

梶雄大（27）が入口から出てくる。

怯える尾畑、後退りする。

茜は尾畑の背中を強く叩く。

茜「逃げるな尾畑！あんた、一生カジって二

文字に、怯えながら生きてくつもり？」

尾畑「いや、たまたま油断してただけです。

普段は大丈夫・・・」

茜「認めなさい。あなたの今のグチャグチャな感情は、屋上にいた頃から何も変わってないじゃない」

尾畑、驚く。

尾畑「先生、あの時の覚えてるんですか？」

ニツと誇らしげに笑う茜。

茜「あなたは特別。ウサギちゃん付きサイン」

尾畑は鞆の中から、ボロボロの本【消

え失せろ、この感情】を取り出し、開

く。茜のサインとウサギの絵。

尾畑は意を決し、本を閉じる。

梶の前に仁王立ちで現れる茜。

茜の背後には尾畑。

現状に理解できていない様子の梶。

茜「梶さん。昔、尾畑を虐めてたの？」

梶は仰天し、後ずさりする。

怯えている様子の梶。

茜「なんで、虐めてた側が怯えるのよ？ 貴方は恐怖を与える側の人間だったのよ」

梶は尾畑を一瞥する。

咄嗟に顔を逸らす尾畑。

茜は梶に近づきながら、

茜「何が貴方を変えたの？ 昔は平気で人を傷つけたり、追い詰めたり出来たのよね？ 今は別人みたいに人の顔色ばかり窺ってる」

梶「・・・」

茜、足で地面を叩く。

茜「早く、答えなさい」

梶は取り乱しながら、

梶「大人になって気付いたんです。もし、自殺されてたら殺人者になってたんだって」

尾畑、凍りつきながら梶を見ている。

梶「お願いだ。許してくれ」

梶は土下座する。

尾畑は梶の背中を蹴ろうとするも、躊躇い足をおろす。

尾畑「・・・違う。お前は謝罪なんかする奴

じゃない」

梶は顔を上げ、

梶「頼む。ネットにだけは拡散しないでくれ。怖いんだ。昔の自分をバラされるのが」

眉間に皺を寄せる茜。

茜「バラされるのが怖い？」

梶「社会人になって、虐めてた経験があるって、自慢になると思えますか？」

茜「良いネタには、なるんじゃない？」

梶は拳を握り、地面を叩く。

梶「ならねーよ。なるはずないだろ。だから、仕方なく良い人を演じて、バレた時に嫌われないように努力してんだろ」

梶はビルを見上げる。

梶「もっと、大きな会社で働いていたんだ。それなのに、俺が学生時代、虐めの首謀者だったって冗談で話したら、周りから冷たくされて、地味な部署に異動させられた」

梶は頭を床につけて懇願する。

梶「頼む。もう、あんな惨めな自分。嫌なん

だ。あんな目にはあいたくない」

茜は大声で叫ぶ。

茜「そんなん気にしてる暇があるんなら、本を読め、本を」

茜は人差し指でこめかみを抑えながら  
茜「生きてくうえで、想像力って大事。本を  
読んで培うのよ。学生の時に、今みたいな  
未来を想像できる力や相手の痛みを想像出  
来る力があれば、虐めは減ってくれるって、  
私は信じてる」

茜は梶を無理やり立たせる。

茜「それに、くだらないこと訴えてる暇ある  
んなら、先に尾畑に謝りなさいよ」

気まずそうな梶。

梶「・・・悪かった。ごめん」

尾畑、拳を握る。

尾畑「先生が教えてくれたんです。川上陽子  
は殴らない。一発の拳で罪が消える程、虐  
めは単純じゃないから。一生消えない、こ  
の感情だけは。相手を殴っても消せない」

尾畑は鞆の中からボロボロの本を取り出す。表紙タイトル【消え失せる、この感情】。

尾畑「一生、許さないから」

尾畑は梶に本を渡す。

尾畑「この本、読んで反省しろ」

茜、力強く尾畑の背中を叩く。

嬉しそうな茜。

表情が綻ぶ尾畑。泣くのを堪えながら、

尾畑「先生、ありがとうございます」

梶は不審に思い、2人の元から離れる。

梶「・・・先生？」

梶は本を見て、ニヤリと笑う。

茜は梶の元へ行き、

茜「梶さん。私、貴方は和泉葵に似てると思ってたの。きっと、自分で自分を押し殺して虐めてるから、そう見えただと思う」

梶「・・・和泉葵って？」

驚愕する茜。ドスの効いた声で、

茜「【消え失せる、この感情】！私のデビュー

「作の主人公でしょうが！バカタレ」

尾畑「（小声）先生、自分で言っちゃった」

尾畑は慌てて茜を制止する。

梶はポケットからスマホを取り出す。

茜と尾畑の歩く後ろ姿。

梶は本を地面に叩き落とし、靴で踏む。

梶「バツカじゃねーの。なにが本を読めだよ。

自分が小説家だからって押し付けてんじや

ねーよ。うっとおしいんだよ。赤嶺先生」

勢いよく振り向く茜。

スマホのフラッシュがたかれる。

尾畑、急いで梶の元へ駆け寄り。

スマホで動画を取っている梶。

尾畑が梶の元へ駆け寄り、スマホを奪

おうとするも、突き倒される。

梶「皆さん、この方。有名な小説家の赤嶺先

生ですよ」

野次馬が集まり、ざわつく。

梶は動画を再生する。

茜の声「（スマホから流れている）【消え失

せろ、この感情】！私のデビュー作の話で  
しようが！バカタレ」

驚愕している茜。

周りの野次馬達から指をさされたり、  
スマホで写真を撮られている。

梶「顔出しNGでしたっけ？」

梶のスマホ画面。【動画サイト】。

投稿ボタンを押す梶。

梶はスマホ画面を茜と尾畑に見せる。

梶「はい。正体ばれました。拡散中です」

茜は下を俯き、深く息を吐く。

SNS上で拡散される茜へのコメント。

【えっ？マジで、赤嶺鏡子？】

【『消え失せろ、この感情』の赤嶺鏡

子さん？お前が消えろ 草】

【偽物じゃなくて？】

【隣の奴、ドラマの会見場にいた。本  
人の確立高め】e t c。

高笑いする梶。梶に向かい殴りかかる  
うとする尾畑。

茜の声「やめなさい」

尾畑「けど、僕のせいで先生の正体が……」

仁王立ちの茜。

梶は2人を見下すように笑う。

茜、梶の元へ行きビンタする。

茜「今の方が、よっぽど人間らしいわ。会社の姿はクソみたいにつまらなかったから」

ブチ切れる梶。茜の胸ぐらを掴み、

梶「絶対殺す。暴力されたって訴えてSNSで拡散してやる」

梶、スマホのフラッシュの光で茜を照らす。

茜はハツラツとした態度で、

茜「どうぞ、ご自由に」

茜は梶のお腹を殴る。

お腹を支えながら苦しむ梶。

梶「痛……」

茜「そうよ、痛いよ。人に手を上げるのも、嫌がることをするのも全部一緒。何で解らないのよ。バカタレが」

梶「はあっ？」

憤慨している茜。

茜「私は悔しい。何で、人の痛みも解らないまま大人になってんのよ。今からでも遅くないから本を読んで学びなさいよ。人の痛みを理解する想像力を身につけなさいよ」

尾畑が茜を制止する。

茜は息を整え興奮を冷ます。

茜「サヨナラ梶さん。お弁当美味しかったわ」

颯爽と走り去る茜。

梶「ふざけんなよ、待てよ」

尾畑が梶の前に立ちはだかる。

野次馬達が茜の方へと散らばっていく。

尾畑「一番聞きたいこと聞いてなかった。なんで、お前は俺を虐めてた？」

舌打ちをする梶。

梶「はっ？覚えてねーよ。どけよ」

尾畑は怒りを抑えながら、

尾畑「・・・惨めな奴」

尾畑はポケットからスマホを取り出し、

梶の目の前に差し出す。

尾畑「生まれて初めて、お前に出会えて良かったと思えた。いつだって、俺はお前にとつての弱みだからな」

梶は舌打ちをし、視線を逸らす。

尾畑、本を拾う。

靴跡が付いた本。

尾畑「先生は、お前すらも救おうとしたのに。どんな人でも事情を抱えてるって。少しでも理解して救いになればって。先生は願いを込めて本を作ってるのに」

立ち去る、尾畑。

梶は尾畑の後ろ姿に向かい、

梶「思い出した。俺は本が大嫌いなのに。お前は楽しそうに本を読んで気に食わなかった。多分、理由は、そんな感じだ」

尾畑は振り向かず立ち去る。

梶は、お腹をさする。

梶「痛――」

梶は力なく、しやがみ込む。

○交差点・横断歩道（夜）

歩行者信号。赤色。

サングラスをかけた茜、信号を待

っている。手にはぬいぐるみ。

茜の背後でカップルがスマホを見なが

ら談笑している

男性A「見ろよ。『消え失せ』の作者。顔バ

レだって。記者会見ぶち壊した罰だな」

女性A「小説、読んだことないから興味ない」

ぬいぐるみを力強く握る茜の手。

信号が青に切り替わり一斉に歩き出す。

通行人にぶつかり、よろける茜。

地面に落ちる、ぬいぐるみ。

○（回想）住宅街・路上（夕）

茜色に染まった空と雲。

ビルが立ち並ぶ。

人が落ちる音が響き渡る。

路上に加賀美葵（13）が倒れている。

額から流れる真っ赤な血。

手に持つピンク色のウサギのぬいぐるみ。  
み。（茜の持つぬいぐるみと同一）

○交差点・横断歩道（夜）

地面の上のぬいぐるみ。

茜は急いで、ぬいぐるみを拾い抱きしめる。  
泣くのを堪えながら、

茜「（弱々しい声で）葵、どうしよう。お母さん、世間にバレちゃったよ」

ぬいぐるみに落ちる一粒の涙。

○加賀美家・葵の部屋・外（夜）

リビング横の部屋。

茜はドアにガムテープで×印を作る。

○（テレビドラマ）葵の部屋・中（夕）

ドアを叩く音。

詩織の声「葵。葵、お願い。ドアを開けて」

和泉葵役のニノはドアにキスをし、

ニノ「バイバイ、陽子ちゃん。順番が回って

こないように、私が全部終わらせるね」

詩織の声「私は葵を必ず守れる。だから、お願い。一人で解決しないで。親友の私に、今すぐ助けてって叫んでよ。私が虐めバトンの呪いをやっつけるから」

ニノ「叫ぶって、一番難しいよ。だって、私を助けたら、次は陽子ちゃんが虐められる。私も、そうやって虐めバトンの呪いにかかったから。こんなの、誰にも渡したくない」

悲しそうに微笑むニノ。

川上陽子役の詩織がドアを蹴り壊す。

部屋の中は誰もいない。

窓から見える茜色に染まった夕日。

詩織は血相を変えて窓から下を覗く。

路上には真っ赤な血の海の上で倒れているニノの姿。

○（テレビドラマ）路上（夕）

救急車のサイレン音が鳴り響く。

血まみれで倒れているニノを抱きかか

えている詩織。

救急隊員が、詩織と二ノを引き離そうとするも、詩織は意地でも離さない。

見物に来ている数名の野次馬。

「自殺らしいよ」

「まだ若いのに、命を無駄にして」

否定するような声と面白がっているような声が続々と聞こえてくる。

詩織は野次馬に向かい、怒鳴り散らす。

詩織「バカヤロー！なんも知らない奴らは消え失せろ。自殺じゃない。簡単に言うな」

救急隊員「落ち着いて。気持ちは解るから」

救急隊員がハンカチを詩織に渡す。

詩織は唇を噛み締める。ハンカチに落ちる涙の粒。

詩織「ねえ、教えてよ。葵が死んだ原因って寿命だったんですか？それとも、病気ですか？なんで誰でも解る死ぬ原因の中に、虐めって無いんですか？」

詩織は野次馬達を見回しながら、

詩織 「勝手に自殺で終わらせないでよ。人が死ぬ原因に虐めも入れてよ。そしたら、バカな奴らでも他人を虐めたらダメだって解ってくれるじゃん」

　　瞼を閉じているニノの顔。

　　詩織はニノの手を取るも、力なく腕がなだれ落ちる。

　　詩織は嗚咽を漏らし、泣き出す。

○加賀美家・リビング・中（夜）

　　間接照明。

　　整理整頓された広いリビング。

　　テレビ画面・ドラマ【消え失せる、この感情】が映っている。

　　テレビ画面の中で、泣き崩れている川上陽子役の詩織。

　　ソファーの上で、ブランケットに身を包んだ茜。呆然とドラマを見ている。

　　茜 「どんなに頑張っても、消えてくれない、この感情・・・」

テレビ画面の中の詩織が大声で叫ぶ。

詩織「消え失せろ。消え失せろ、この感情！」  
茜は、うつろな表情でぬいぐるみを抱  
きながら目を閉じる。

○出版集豪社・文芸部・中（朝）

鳴りやまない電話の音。

書類やフィギュアで乱雑している編集  
長デスク。

椎名がスマホを見ながら、ホロリと泣  
いている。

スマホの画面・ドラマ【消え失せろ、  
この感情】

他の社員達が電話対応で追われている。

椎名は夢中でスマホを見ている。

尾畑が椎名のワイヤレスイヤホンを取  
り外し、

尾畑「編集長！」

驚く椎名、スマホを落とす。

椎名「どうした。珍しく怒ってんな」

尾畑「怒ってません！僕、先生が心配なので  
外出します」

鳴りやまない電話の音。

椎名が尾畑を促す。

苛つきながら、受話器を取る尾畑。

尾畑「はい、集豪社です。赤嶺の動画に関し  
ましては確認でき次第、後日表明しますの  
で。はい。では、失礼します」

深いため息を吐く尾畑。

デスクのキャビネの中に茜の家の鍵。

椎名「ボタンタッチ」

尾畑に向け軽めに鍵を放り投げる椎名。

尾畑はキャッチできず、床に落ちる鍵。

椎名「葵ちゃんから貰った。あの子の初恋は  
俺だからさ。いつでも家に来てね。だって」

尾畑「葵・・・？小説の葵？」

椎名「・・・お前、【消え失せろ、この感情】  
って、ほぼほぼ先生の实話。葵は先生の娘」

尾畑「（絶句しながら）・・・だって、葵は  
小説の中だと。まさか、先生は明るい人で

すよ。辛い過去があるなんて微塵も」

椎名「尾畑君。女を見る目を養いなさい。表面上は明るく振舞い、裏では一人落ち込み悩みだらけ。女は隠すのが上手い生物なの」  
尾畑「・・・先生も・・・ってことですか？」

電話の鳴る音。

椎名「おっと、電話出なきやね」

受話器を取る椎名。

尾畑は、鍵を握り締め急いで飛び出す。  
椎名は電話をしながら、キャビネの中から手紙を取り出す。

椎名「動画の話？赤嶺鏡子先生かもしれな  
いです。本人から表明しますので。では」  
手紙の文面「椎名さん、お母さんをよろしくね。葵より」

○加賀美家・玄関入口・外

尾畑はもどかしい様子でチャイムを鳴らし続ける。

離れた位置で、妊娠中の加賀美葵（3

2)が尾畑を不審そうに眺めている。

尾畑の手に持つ茜の家の鍵。

尾畑は意を決し、鍵を差し込む。

葵の声「あの・・・家に何か、ご用ですか？」

尾畑を警戒している葵。

尾畑「家？ここ、加賀美茜さんの家ですが」

葵「そうです・・・私は娘ですが」

尾畑「・・・葵は生きていますか！」

尾畑は意味が解らず仰天する。

○同・リビング・中

ソファーの上で、寝ている茜。

尾畑の声「先生。先生、起きて下さい」

寝ぼけながら起き上がる茜。

茜「あんた、なんで勝手に入ってるのよ。今

日は打ち合わせの日じゃないでしょ」

呆れ果てている尾畑。

尾畑「なんで、そんな元気なんですか！あん

なに嫌がってた、赤嶺鏡子の正体バレちゃ

ったんですよ！普通に落ち込んでください」

茜は背伸びをしながら、

茜「このご時世だから仕方ないって諦めたわ」

憤慨している尾畑。

尾畑「僕は、先生が解らない」

茜「尾畑じゃ無理よ。自分でも解らないんだから」

葵が右足を引きずりながら入ってくる。

葵「お母さん、せっかく来てくれたんだから。

そんなこと言わないの」

茜「あら、葵のこともバレちゃった？」

葵「なんで、担当の方に内緒にしたの？」

尾畑「そうですよ！聞いてないですよ！娘がいたなんて」

茜は首を傾げながら、

茜「孫もいるわよ。言っただけだったっけ？」

加賀美緑（5）加賀美琥珀（3）が、

おもちゃの剣を手に尾畑に追突する。

琥珀の剣が尾畑の脛に当たる。

痛みで悶絶する尾畑。

緑「ばあば、これ、だれ？」

茜「ばあばの担当のオバタよ。緑と琥珀、良かったわね。沢山、遊んでもらいなさい」

嬉しそうな緑と琥珀を横に、嫌そうに拒否している尾畑。

尾畑「せ、先生、僕、子供は本気で苦手で」

茜「あんた、人間全般無理じゃない」

尾畑「そうゆう問題じゃ」

茜「私も朝から、この子達と遊んで疲れたわ。

このままじゃ、原稿遅れちゃうわ」

尾畑は葵に助けを求めると満面の笑顔で、かわされる

緑と琥珀は尾畑を引っ張り和室へ連れ出そうとする。

ガムテープで×が付いたドア。

緑「あの部屋、黒い魔物がいるんだって」

琥珀「ダメ。入っちゃ」

尾畑はドアを一瞥し、琥珀と緑と和室に行く。

葵「お母さん、魔物って何よ。子供達に変な言葉を教えないでよね」

茜「男同士でエッチしちゃう漫画がある部屋だよって、本当のこと伝えようか？」

葵「・・・このままで、お願いします」

葵は散らかったゴミを片付ける。

茜「葵、母さんの心配してるなら大丈夫だからね」

微笑みながら頷く葵。

○同・リビング（夕）

ソファで寝ている尾畑と琥珀と緑。

葵がドアのガムテープを取り外す。

○同・葵の部屋・中（夕）

本棚にはBL漫画や少女漫画がズラリ。

床には手紙がギッシリ詰まった箱が置かれていた。

葵はノートを読んでいる。

尾畑が部屋に入ってくる。

葵「起きたんですね」

尾畑は気まずそうに、

尾畑「すみません。あの・・・【消え失せる、

この感情】って先生の実話だって聞いて」

葵は窓から見える夕日を見つめ、

葵「ちよつとだけ、私と母の話をしてても良いですか？」

頷く尾畑。

葵「母は元ヤンで、18歳の時に私を産んでその後、父が交通事故で亡くなりました。

貧乏な2人きりの家族だけど、楽しかった」

葵はノートをめくる。

【ママと葵の交換日記】

【葵の未来は明るいよ】

【大丈夫。お母さんが味方だからね】

ウサギの絵。

葵「中学の時、私が飛び降り自殺の巻き添えになって脚を怪我したんです」

尾畑は葵から顔を逸らす。

葵「自殺した方が、私達にとっては加害者になっちゃったんです」

尾畑「・・・」

葵は手紙が入った箱を尾畑に見せ、

葵「毎年貰ってた謝罪の手紙。自分が今、親になって思うんです。自分の子供が自殺して加害者にまでなつて、どんな気持ちだったんだろうって」

尾畑は拳を握り締めながら、下を俯く。

葵「私、母とは真逆で地味な性格だから。脚に障害が残った時、なんで私だけ？って憎しみや恐怖やドロドロした感情に支配されてました。この手紙も読みたくなかった」

尾畑「僕は昔、飛び降りて死のうとしてました。だから、その・・・」

葵「私もです。だから、小説の中の葵は飛び降りてるんです。あの時の死にたくなかった感情と暗かった葵とサヨナラできるようなって母の願いが込められています」

尾畑は顔を上げる。

葵は尾畑にノートを渡す。

葵「【消え失せろ、この感情】は自殺してしまった子の親が抱いた悲しみや怒りの感情

を引きこもってしまった私に伝えたかった  
のと。私を元気づける為に母が作った小説  
です。ほぼ実話でしょ？」

微笑む葵。

葵「母の作品を編集長の椎名さんに売り込ん  
だのは私です。尾畑さん、これからも小説  
家の母をよろしくお願いします」

尾畑「任せて下さい。担当ですから」

尾畑は、葵に向かい微笑む。

○住宅街（夕）

紫色に染まる空と雲。

3〜5階建てのアパートやビルが立ち  
並ぶ。茜はビルの上を見上げる。

○本屋・屋上（夕）

茜が、手すりの前で街を眺めている。

息を切らした尾畑が屋上に入ってくる。

尾畑「先生、葵さんから聞きました」

茜は振り返り、尾畑を見る。

尾畑「飛び降り自殺を止める為に、ビルの上を見てパトロールしている。だから、堂々と街を歩けるように顔を出したくないって」

茜、鼻で笑う。

茜「真相は秘密よ」

尾畑は手紙を茜に手渡す。

(葵の部屋にあった手紙と同一)

尾畑「もしかして、飛び降り自殺した子供の親の為ですか？」

茜は尾畑に背を向ける。

茜「・・・なぜ、そう思ったの？」

尾畑「先生が有名になったら、葵さんの事故を記事にする奴が現れるから。そんな記事、自殺した子の親に見せたくないから」

屋上から路上が見える。

人通りが少ない。

茜の足元に一粒の涙が落ちる。

茜「その子のご両親がね。私と葵の前で土下座したのよ。虐めに気付いてあげられなかった自分達が悪いって。悔しそうに。そ

して、とても悲しそうに」

あーっと大声で発狂する茜。

茜「正直、私も解んないのよ。この感情が。

娘の脚を怪我させて憎んでる。けど、親の  
気持ちも解るからさ。モヤモヤすんの」

茜は両手で頭の上の何かを取っ払おう  
としている。

茜「ほら、また出てきた。頑張っても消せな  
い、この感情！嫌なのよ。自分じゃなくな  
るみたいで。消したいの」

尾畑「先生、逃げないで下さいよ。僕には逃  
げるなって言ったじゃないですか」

茜は尾畑を鋭く睨み、

茜「誰が逃げてるって。舐めた口きいてんじ  
やねーよ」

尾畑はビビリながらも、

尾畑「逃げてます。隠したり消そうとしたり。  
全然、向き合ってない。僕には、梶の前に  
立たせたくせに」

茜「一緒にしないでよ。私は平気」

尾畑「今みたいに、モヤモヤした感情を隠すために、いつも過剰に明るくしてるんですよね？」

茜「……」

尾畑「梶の前に立って、僕、解ったんです。消え失せろって、怯えた奴が言う言葉だ」

茜は舌打ちをして、尾畑を蹴る。

茜は尾畑に向かいメンチを切る。

茜「生意気」

尾畑「いいじゃないですか、生意気でも。だって、僕は先生の担当で先生が助けてくれた命だから。先生が一人で困ってるなら生意気でも、助けたいんです」

茜は尾畑の背中を強く叩き、

茜「行くわよ。この感情、小説にしなきゃ勿体ないわ」

尾畑は満面の笑顔を浮かべ、

尾畑「はい！」

茜はニッと笑い、

茜「私は小説家よ。文章にしながら感情と向

き合ってるのよ。例え、本が絶滅しても書

き続けてやるんだから」

尾畑「本は消えませんが。僕みたいに本が好きで、先生に救われた人が沢山いるから」

笑顔を浮かべる茜。

茜「もう潜入OLは辞めるわ」

笑い出す尾畑。

尾畑「とつくに。もう、辞めてますよ。編集

長が、先方の会社に話してくれました」

茜「・・・悪かったわね。振り回して」

尾畑はニヤニヤしながら、

尾畑「珍しい。先生が謝った」

茜「尾畑のくせに、生意気」

茜は尾畑の背中を強く叩く。

○本屋・イベントコーナー・中（夕）

看板【赤嶺先生、新作発売イベント】。

観客が続々と集まりだす。

観客の手には新作本【かかってこいや、この感情】。

○同・控室・中（夕）

緊張している茜。ぬいぐるみを握り心を落ち着かせている。

尾畑が控室の中に入ってくる。

尾畑「先生……。緊張してるんですか？」

茜「悪い？こう見えて、シャイシャイガールなのよ」

ぬいぐるみを抱きしめる茜。

尾畑「着ぐるみも、ピンクのウサギでしたね。

ラッキーアイテムなんですか？」

茜「死んだ旦那からのプレゼント。私、ピン

クのウサギに似てるらしいわ」

絶句している尾畑。背後に椎名。

椎名「ウサギみたいに寂しがり屋なところは

似てるかもな。ほら、行くぞ。時間だ」

茜は深呼吸をし、自分の頬を叩き気合を入れ、飛び出す。

○同・イベントコーナー・中（夕）

沢山の拍手の中、登場する茜。

舞台袖には尾畑と椎名。

堂々とした振る舞いの茜。

茜は司会者の隣に座る。

司会者「この度は新作本の発売、おめでとう  
ございます」

茜「どうも、有名な小説家の赤嶺です。ネット  
で顔バレしちゃったんで、今度から堂々と  
人前に出させて頂きます」

司会者「新作本はドラマにもなりました【消  
え失せろ、この感情】の待望の続編とのこ  
とで、喜ばれているファンが沢山いらつし  
やるそうです。先生、一言いただけますか」

茜、観客席の中にいる梶に気付く。

茜と梶、目が合う。梶は顔を逸らす。

茜は司会者の話を遮る。

茜「皆さん、生きてくうえで、想像力ってと  
ても大事。つまらない日々でも工夫したら  
楽しくなるって、私は信じてます」

茜は梶を見て、

茜「自分の過ちが、未来の自分へバトンを渡

した時、どのくらい重くなってるのか。そして、どうすれば自分の未来は明るくなるのか。本を読んで、想像力を培いなさい。とにかく、新作面白いから、読みなさい。感想待ってるから」

静寂が走る観客。

茜「返事！」

観客達、一斉に「はいっ！」。

梶は恐る恐る手を上げ、立ち上がる。

梶「本当に、本を読んだら未来は明るくなるんですか？」

茜「そんなん、知らんがな」

一同、ざわつく。

茜「それでも、私は自分の本で沢山の人を救いたい。飛び降りるのを辞めた子もいた。その子が言うには、本を読んでいる時は、現実逃避ができる」

尾畑が微笑む。

茜「誰からも気付いてもらえなかった真っ黒な感情を本の登場人物も持っていて、1人

だけじゃないって思えて救われた。読み終わった後に、清々しくなった。これだけで充分、本を読む前の未来よりは明るくなるわ。とにかく、【かかってこいや、この感情】を読め。本の価値はその後に決めなさい。解った？」

梶「・・・すみませんでした」

観客が拍手する。

尾畑、スマホを見る。

SNS上で拡散される茜へのコメント。

【赤嶺先生の新作最高】

【読むと元気になる】

【私、赤嶺先生に救われた】等。

茜は、誇らしげな表情で笑い、颯爽と舞台から降りる。

尾畑「先生、かっこよかったですよ」

茜「そんなの知ってるわよ」

茜の脚はガクガクと震えている。

よろけながら控室へと歩き出す茜の後ろ姿。